1 FUJINO sample_original IWP 2017

男の子を引っ張って来て、男の子が気分を悪くして目を逸らすのを、女の子が得意げに見守ることもある。まれに、二人して長いことケースやキャプションを指差してひそひそと話し合い、丸く見開いた目を近づけてそれを観察していく者もある。

キャプションには、「人魚のミイラ（猿と鮭の死骸を縫い合わせてつくったもの）19世紀・日本」と書かれている。

それは、自分の前で立ち止まる人々に、いつも同じことを言って聞かせようとする。いまやそれは博物館の展示物として、人々を啓蒙する任を負っているからだ。

「生きていると、ときに自分の望まない自分の像を押し付けられることがある。また、自分が理想の自分とはまったくちがうものに成り果ててしまうこともある。しかし、人生でいちばん大切なのは、ありのままの自分を受け入れてくれるパートナーに出会うことだ。そして、自分自身でもありのままの自分を受け入れること。それが死骸であれゴミであれ、なんであれ」

それの言葉を聞く者はいない。人々がそれから学ぼうと期待しているのは、少なくともそういうことではない。しかし、それは気にしない。相手が聞いていようがいまいが、それはやるべきことをやり続ける。

今日の心霊

のちにmicapon17という名で知られるようになる彼女が、その稀有な才能をはじめて開花させたのは、まだ二歳と十ヵ月のときであった。またそれは、彼女がはじめてカメラを手にした記念すべき日でもあった。当時はデジタルカメラは普及しておらず、カメラ機能つき携帯電話はおろか、携帯電話自体普及していなかった。両親が面白半分に彼女に手渡したのは、三十六枚撮りのフィルム式使い捨てカメラだった。だから、両親が娘のおそるべき才能に触れたのは、その日からちょうど一週間後、現像されたフィルムと同時プリントを写真店で受け取ってきてからのことである。

それらを受け取りに店頭に現れたのは、彼女の父親であった。彼は、代金を支払い

10154_おはなしして子ちゃん_01.indd 78 2017/05/11 18:03

2 FUJINO sample_original IWP 2017

ながら、店員の様子がおかしいことに気付いていた。店員は、何度も何かを言い出そうとして口をつぐんだ。

「なにか？」と父親は尋ねた。店員は、父親が手元に引き寄せようとしていた紙袋をとっさに指で押さえ、すぐに「あっ」と言って体ごと飛び退いた。父親は、この店員はどこか少し変なのだと思った。この程度の変な人なら、どこにでもいる。極端におどおどした態度しかとれなかったり、挙動不審であったりする人でも、世の中に出て働かねばならぬのだ。こういった場合、深入りしないのがお互いにとって一番だと判断した父親は、なにごともなかったかのように紙袋をつかみ上げ、さっさと背を向けて歩き去った。そして、帰宅してから、店員が変人ではなかったことを悟った。彼が言いたかったことがなんなのか、父親にはよくわかった。そして、それがどうしても言葉にならなかったことも。

父親だって、言葉にできなかった。それは母親も同じだった。母親はmicapon17を抱いていた。micapon17は、必死に腕を伸ばして父親が手にしている写真に触れようとしていた。母親は、写真に目を奪われたまま、micapon17を写真から遠ざけようと何度も抱き直した。micapon17は、しまいには泣き出した。しゃくりあげながら、「それみかちゃんのぉ」と言った。

「みかちゃんのじゃない、みかちゃんのじゃないよ」はっとして母親が叫んだ。

嘘だ。もちろんmicapon17が撮った写真であった。それは、三十六枚のうちの二枚だった。その使い捨てカメラは家族三人で少し遠くの自然公園に遊びに行った際に使われたもので、残りの三十四枚は母親か父親によって撮影された。写っているのは帽子をかぶせられたmicapon17、お弁当のいちごをしゃぶるmicapon17、芝生を走るmicapon17、父親の膝に乗せられ上機嫌で手を突き上げるmicapon17、micapon17の後ろ姿と腰をかがめてそれを追う母親など、我々にとっては本来無価値極まりない平凡な家族の記録であった。しかし今日、我々は、三十四枚すべてに写っているこの幼女、幼女であるという以外に傑出した可愛らしさを持たないその姿を、大きな感慨とともに鑑賞しないわけにはいかない。思えば、これがすべてのはじまりだったのだ。

その二枚を含め、この日の写真のネガはとある筋から流出し、我々の手元に保存されている。劣化に備えてデータ化も済ませ、バックアップも万全である。父親がその日、その二枚のプリントを握りつぶし、生ゴミといっしょにゴミ袋にぶち込んだ事実を鑑みれば、二十年以上の時を経て画像が日の目を見たことは奇跡に近い。だが、一眼レフはおろか比較的安価のコンパクトカメラさえも買わずにいるほど写真にもカメ

81
80 10154_おはなしして子ちゃん_01.indd 2017/05/11 18:03

3 FUJINO sample_original IWP 2017

ラにも関心の薄い一般層であれば、ネガの中から二コマを見つけ出し、ハサミで切って捨てるなどといった機転は利かないものである。micapon17の両親は、愛娘の姿の写った三十四枚を写真店がおまけで配っている粗末なアルバム（プリントを挿し込むポケット状の透明フィルム部分がすぐに湿気てしわしわになるため、長期の保存には向かない例のあれだ）におさめ、ネガは写真店の紙封筒に入れて他のネガと共に菓子の空き箱に収納した。我々は、micapon17の両親の無知に感謝する。

　さて、問題の二枚である。いまや我々にとって伝説となった二枚、それは、二歳と十ヵ月のmicapon17がファインダーを正確に覗くことができずただ眉間にあて、小さくやわらかな指でシャッターを切って撮影した二枚、一枚はmicapon17の両親の笑顔のバストアップが下方からのアングルで写り、もう一枚は蝶を追ったものの使い捨てカメラごときの固定焦点レンズでは宙を舞うゴミ程度にしか見えず、ほとんど空だけが写り込んだ写真であるはずだった。もし、これがmicapon17以外の人物が撮ったのであれば。

　一枚目に写っている両親の顔と体は、逆光によって非常に暗く、ざらつく粒子で構成され、人ではなく砂の像のようである。そして、正真正銘人ではないものが、彼らの背後にある。ふたりの頭部のあいだに垣間見える空を埋めるように、空をふわふわ

移動している最中にふと覗き込んだとでもいった様子で、左目の眼球を眼窩からぶらさげ、鼻血を出した中年男の首が、ばっちりカメラ目線で焼き付けられているのだ。彼の姿は順光で捉えられているため、生身の両親よりもよほどくっきりと写っている。

　二枚目は、前述のとおり空と蝶の写真だ。画面全体は空で、うっかりしていると、プリントにゴミが落ちたのかと手で払いかねないほどのゴミらしさで蝶がほぼ中央に、右下部に母親の麦わら帽子をかぶった頭部がブレて入り込んでいる。そして、やはり正真正銘人ではないものが画面左上部から斜めに写っている。それは、さかさになって天空から落ちて来ようとしている髪の長い女の全身像であり、こちらもばっちりカメラ目線かつピントも完璧である。絡み合う黒髪のディテール、目のしたで青くふくれあがった隈、爪の剥がれた指先などの豊かで精密な描写は見事の一言だ。

　この二枚の処女作において、micapon17の作風は、すでに完成していた。つまり、micapon17は、成人し、二児の母となった現在においても、一般的な意味での撮影技術には長けているとは言えず、被写体はしばしば意図せずにブレるし、光量への配慮はむしろ乏しい。にもかかわらず、人ならざるものの姿は、同一画面でありながらまったく別のシャッタースピード、まったく別の光源を利用して撮ったかのよう

83
10154_おはなしして子ちゃん_01.indd 82 2017/05/11 18:03

4 FUJINO sample_original IWP 2017

な明晰さで、過不足なく撮影されるのである。

ああ、そろそろためらいを捨ててはっきりと言おう。なにごとにも名前は必要だし、その名前は人心に馴染みやすく、興味を喚起するものであるべきだ。そうだ、micapon17こそは、我々のもっとも注目するただひとりの心霊写真家である。彼女が撮った写真には、必ず心霊が写っている。必ずだ。我々は、ときどき彼女の写真を見ながら複数の被写体を指差し、「どちらが心霊かわかったものではない」などと冗談を交わすが、それもmicapon17の撮影技術を讃えて言っているのである。

ここで、誤解を生まぬよう強調しておきたいのだが、我々は決して心霊などというものの存在を認めているわけではない。我々はもともと心霊を愛好して集った組織ではない。我々を結ぶのは写真であったのだ。写真を愛好する者にとって、肉体は重要である。いるのかいないのかわからないような幽霊みたいなものは被写体には適さない。死体ならよい。正しく光を反射する。倫理や常識や公序良俗のはなしなら、ここではしない。今でこそむやみに死体を撮影することはタブー視されるが、かつては写真と死体は婚姻関係にあった。理由はかんたんだ。十九世紀に発明された世界初の実用的な写真技法であるダゲレオタイプは、現在流通しているカメラとはちがって長い露光時間を必要としたのである。ぴたりと止まって動くことのない死体と相性がいい

のも当然であろう。事実、アメリカやヨーロッパの一部地域では、愛する家族が死ねば埋葬前に亡がらを撮影し、高価なガラスのケースにおさめて身近に置いたという。

そういった写真には、大きく分けると二つの種類がある。故人が単独で写っているものと、生きた人間が故人と共に写っているものである。前者だけを見たならば、被写体が死体であることに気付かず、古い写真とは不気味なものだという感想を持つにとどまるかもしれない。しかし、後者を見れば、死者と生者の差は一目瞭然である。すなわち、もはや呼吸も鼓動もやめた死体こそがまわりの家具や調度品と美しく調和して克明に写り、長い露光時間を必死で耐える生者の像にはブレが生じている。生者はまるで、完璧な世界に闖入してしまった部外者のようである。写真がその黎明期において、いかに死者と緊密であったかが窺い知れるというものだ。

それから二百年近くが経った。写真史をひもとけば、洋の東西を問わず、心霊写真なる概念がいつ発生し、どのように流行し、流通し、またどのような変化を遂げて今日に至るのか、人が、社会がなにを心霊写真に求めてきたのかが詳らかになるだろう。が、我々は専門家ではなく、有志の集まりに過ぎない。我々の活動とmicapon17の諸作品について、真に意義ある位置づけをおこなうのは、のちの研究者に譲るとして、ここではひとまず素人集団である我々がmicapon17の写真を心霊写真と定義し

10154_おはなしして子ちゃん_01.indd 2017/05/11 18:03

5 FUJINO sample_original IWP 2017

た理由を述べておきたい。

我々は心霊にいささかの関心も持たない。我々はおのおの何万枚もの写真を撮ってきたが、心霊の撮影に成功したなどと騒ぎ立てる者はいなかったし、これからもそうであることを願っている。そんな我々がmicapon17を心霊写真家と呼び、その活動を見守っているのは、彼女の写真がいまや忘れ去られようとしている写真と死者との関係を呼び起こすものであるからだ。二枚の処女作に見られる眼球をぶらさげた男の生首、はるか上空からまっさかさまに落下してくる女は、どちらも撮影当時の公園では目撃されなかったことが調査で明らかになっている。それに、そもそもどちらも通常の生きた人間とはとても考えられない姿・姿勢を取っていることからも、現在のところそれらに充てる言葉としては「心霊」が妥当であろう。繰り返して言うが、我々は心霊の存在を肯定しているわけではない。micapon17の写真作品に写し出されている被写体のうち、撮影現場に我々の目に見えるかたちでは存在しなかったものを指して「心霊」という言葉を使っているのである。そしてその「心霊」は、いつも身体に激しい損傷があるか、自然科学的にあり得ない角度から写り込んでいる人間らしきものであり、世間一般に流布している心霊のイメージと合致する。以上のことから、我々はmicapon17の写真を心霊写真と定義することとした。

しかし、このような用語解説では、micapon17の諸作品の魅力はおろか、我々がいかにmicapon17の写真に惹(ひ)かれているかを伝えることはできないだろう。我々がなによりも重要視し、心を打たれるのは、前述のダゲレオタイプによる死者のポートレートと、micapon17によるスナップの形式的な類似である。そう、生者の像が不安定で、死者の像が安定しているという、写真黎明期に顕著に見られる特質を、写真史など知りもしないmicapon17が運命的に受け継いでいる、そのことが我々をかくも感動させるのだ。

考えてもみてほしい、昨今テレビやオカルト本、あるいはインターネット上で取り沙汰される心霊写真を。それらに写っているとされる心霊たちは、みな揃いも揃って不鮮明ではなかったか。はっきり写っていると恐れられるものですら、生きた人間以上の鮮明さを持ち得ただろうか。ましてや、micapon17が日々成し遂げているほどの明瞭さで暴き立てられた例がほかにあっただろうか。生の鮮烈さに比べ、死はあまりにも謎めいていて、我々の手には負えない。だがひとたび写真に捉えられると、死こそが明るく照らし出され、生は死が地面に落とす長い影でしかない。micapon17は、写真技術の発展に浮かれ騒ぐ我々に、写真の本質を鋭く突きつけているのである。

87
86
10154_おはなしして子ちゃん_01.indd
2017/05/11 18:03

6 FUJINO sample_original IWP 2017

micapon17の両親は、不幸なことに娘の才能に価値を見出さなかった。それ以来、家庭ではなんとなく写真が忌避され、幼稚園などで娘の写った写真が配られるたび、あるいは親子揃ってカメラへ笑顔を向けることが求められるたび、両親の胸には不安が渦巻いた。もちろんそれらはmicapon17が撮影したものではなかったので、ただの、退屈極まりない素人写真に過ぎなかった。両親はそれらを見てほっとしたものの、二年後、micapon17の弟が生まれるまで、家庭に使い捨てカメラが持ち込まれることはなかった。

二年ぶりにカメラを手にしたmicapon17であったが、天性の才能に陰りはなかった。micapon17は、生まれたての弟に授乳する母親と、その隣に断面もあらわに立ち尽くす腰から下だけの女の心霊を撮影した（このネガもとある筋から流出し、今は無事我々の保護下にある）。今度こそ両親は、家庭からカメラを締め出した。幼いmicapon17と彼女の弟の記録は、事情を知らない祖父母、家族ぐるみでつきあいのある近隣の友人たち、幼稚園や小学校などの外部に完全に委託された。

micapon17が両親の目の届かないところでカメラと関わりを持つのは、中学生になってからのことである。事件は、二年生の春に起こった。とある学校行事に参加した際、micapon17も周囲の友人たちと同様、小遣いで買い求めた使い捨てカメラを

用いて、積極的に写真撮影をおこなった。

micapon17は、現像されたネガと同時プリントの受け取り時に、かつて彼女の父親が味わったような違和感を覚えたが、さほど気にはせず持ち帰り、自室で一人、写真を一枚一枚確認した。どの写真を何枚焼き増ししてどの友人に配るか、手帳にリストまで作成していた。ここで、驚くべき事実が判明する。なんとmicapon17は、自身の撮った写真に写っている人ならざるものを、認識できないのである。

彼女は翌日、写真を携えて意気揚々と登校し、友人たちを席のまわりに集めた。そこで何が起こったかは想像に難くない。瞬時にして悲鳴が沸き上がり、多感な女子中学生らしくうずくまって泣いたり、吐く者まで現れた。突然の非日常に喜んで飛び込んで来た男子中学生たちも怒号を上げ、腰を抜かし、慌てて駆けつけた教師たちのなかには鬱を発症し休職する者も出たという。ところでこの阿鼻叫喚の渦のなかで、micapon17はどのような反応を見せたか。我々は、彼女の本能に敬意を表さずにはいられない。なんとmicapon17は、目の届くかぎりのすべての同級生や教師とまったく同じように涙を流し、助けを求めて叫び、椅子から転がり落ち、手近な女子と抱き合って嗚咽（おえつ）したのである。

泣き叫ぶ人々のなかで、micapon17だけが原因を知らなかった。彼女だけが、な

10154_おはなしして子ちゃん_01.indd 2017/05/11 18:03

7 FUJINO sample_original IWP 2017

ぜ自分が泣き叫んでいるのかを知らずに泣き叫んでいた。彼女は、考えることを一切しなかった。瞬時に発生したパニックに、従順に身を委ねた。結果として、その判断は彼女の身を守った。加えて、教師の一人が写真をすべて拾い集め、ネガを鷲掴(わしづか)みにして焼却炉に投げ入れたことも功を奏した。パニックに陥った人々は、あとで一人一人呼び出されて原因を尋ねられたが、証拠となる写真が残されていない以上、また、その写真に写っていたのがよく知られる心霊写真の域を超えてあまりにも信じがたい光景であったために、ほとんどの者が口ごもり、結局は「写真がなんだかとても怖かった」ということしか伝えることができなかった。micapon17もその一人だった。

micapon17は、自身に疑いを持たなかった。恐怖に理由など必要ない。恐怖はただ感じるものであり、micapon17は、彼女自身が感じた恐怖のみを信じた。みんなが写真を恐れるので、micapon17も恐れた。ただそれだけであり、それがすべてだった。具体的な証言をした者も幾人かはあったようだが、聴取した側はまともには取り合わず、むしろそういった証言者たちはパニックの度合いがひどいと見なされた。事件はうやむやのうちに集団ヒステリーの好例と結論付けられた。

micapon17が三十六枚すべてを彼女自身の手で撮り切ったそのあまりにも貴重なネガフィルムが永遠に失われてしまったことを、我々は遺憾に思う。なぜなら、その

ネガフィルムは、micapon17が撮った最後のネガフィルムとなったからだ。

その事件以来、micapon17は写真を遠ざけるようになった。それは、micapon17の級友たちも同様であった。micapon17は、級友たちの多くと共に地域の高校に進学したので、その高校には写真を嫌う繊細な少年少女がどっと流入することとなった。そのような感受性は思春期の少女のあいだでは伝播(でんぱ)しやすい。高校は、たちまち写真やカメラを神経質に嫌悪する少女で溢れ、まるでそういった感性自体が流行のような様相を呈した。おかげで、高校の平和が破られることはなかった。もっとも、あの頃の少女たちにもはやフィルムカメラは必要なかった。自分たちの容姿を確かめ、自己満足を満たすのに最適な機械、通称プリクラが爆発的に普及していたからである。我々の調査によれば、micapon17は女子高生らしく大いにプリクラを楽しんだようだ。正確に言えば、通常のカメラから遠ざかった分、ふつう以上にのめり込んだ。複数の人数で撮影することが多く、基本的に友人同士で交換するプリクラにおいて、特に騒ぎが発生しなかったという事実は、micapon17のプリクラが心霊プリクラでなかったことを意味する。撮影ボタンを一度たりともmicapon17が押さなかったとは考えにくいが、プリクラは撮影ボタンを押してから秒読みがあり、機械のほうで勝手にシャッターを切る。おそらくはそういった過程のせいで、プリクラは

91
90 10154_おはなしして子ちゃん_01.indd 2017/05/11 18:03

8 FUJINO sample_original IWP 2017

micapon17の撮影行為には当てはまらず、ゆえに心霊プリクラとはならなかったのだろう。

このmicapon17のプリクラ体験を、我々は決して軽視するものではない。それどころか、これこそがのちのmicapon17の基礎を築いた重要な節目であった。

micapon17の大学在学中に、カメラ機能つき携帯電話が普及し、デジタルカメラの値が下がって一般大衆のものとなった。micapon17は相変わらずあまり自分からはカメラに触れたがらず、友人たちとときどき一緒に被写体となるのみであった。

転機は、大学生活が終わり、地元から離れた土地に就職したことにより訪れた。親類縁者も友人もいない土地で、micapon17は孤独をまぎらわすためにブログをはじめた。そして、はじめはちまちまとした文章ばかりであったブログに、携帯電話で撮影した写真が添えられるようになった。アカウント名、micapon17。偉大なる心霊写真家の誕生である。

micapon17の初期のブログにアップされた写真は、おおむね手料理や外食先の料理、道ばたの花、空模様である。解像度の低い、小さな画像であったが、それらにはたしかに心霊たちが写り込んでいた。画面いっぱい料理を撮った写真にさえ写っていたのだ。もっとも全身というわけにはいかず、切断されて青ざめた指や手、なんとか

画面に入ろうともがく顔半分であったりしたが。当初は閲覧者数の非常に少なかったブログであったが、ほどなくして炎上した。コメント欄は、micapon17を口汚く非難する者で溢れかえった。micapon17にはわけがわからなかった。なぜ、画像におかしな加工をするなだとか、趣味が悪いだとか、お前は呪われているだとか、通報するなどと書かれなければならないのか。我々が騒ぎに気付いた翌日に、micapon17はブログを閉じてしまった。

我々は、なんとか取得に成功したブログの全データを解析し、micapon17の画像に加工のあとがないことを知り、そして彼女の写真の価値を知った。我々は、再びmicapon17がネット上に姿を現すことを祈り続けた。六年後に、micapon17は応えてくれた。彼女は結婚をし、第一子を身ごもっていた。彼女がはじめたのは、日々の自分の着衣を記録するブログであった。ブログのタイトルは、「micapon の今日のコーデ」であり、プロフィール欄には「ID:micapon17　ママになってもおしゃれでいたい。ダンナちゃんにはナイショでやってます。オンナは秘密を持たなきゃね」とあった。micapon17は、自身の全身を自宅の姿見、あるいは駅や百貨店などのトイレの全身鏡に映し、それを携帯電話で撮影してブログにアップしていた。もちろん彼女の背後には、ときに前方には、必ず心霊が一体以上写っていた。心霊たちは笑顔から

93
10154_おはなしして子ちゃん_01.indd 92 2017/05/11 18:03

9 FUJINO sample_original IWP 2017

恨みに満ちた表情までさまざまな顔を見せてくれているが、ほぼカメラ目線であり、写真に撮られることを意識している様子が見てとれる。写真自体は、画面中央に陣取るmicapon17の身体に見苦しい影が落ちていたり、画面全体がわずかにブレていたりと素人写真のなかでもとりわけひどいものであったが、心霊たちは美しかった。えぐれた傷口から覗く、血管の切断面さえくっきりと写っていた。

悲しいことだが、このブログもまた、ほどなくして炎上した。我々にそれを止める手だてはなかった。再び我々はmicapon17を失おうとしていた。我々はなにもできず、ただ呆然とパソコンの画面を見つめた。

しかしありがたいことに、micapon17の神経は図太くなっていた。彼女はブログを閉じたが、間をおかずして別のブログを立ち上げたのである。タイトルもＩＤも同じであった。我々は歓喜した。micapon17の、どうあっても自分の装いを世界に知らしめたいというその執着心に乾杯した。だが、もはや我々もただ手をこまねいてはいられまい。どこでブログをはじめようと、micapon17のブログは炎上するだろう。我々は、micapon17を芸術のわからない者どもから保護し、安心して撮影行為と作品発表を続けられるよう環境を整えねばならない。折しも、ＳＮＳが広く利用されるようになっていた。我々も、世界中にいる同志との連絡を簡便に執り行うため、

すでに専用のＳＮＳを組織していた。このＳＮＳを、micapon17のために捧げることとしたのである。

我々は、まずmicapon17のブログ周辺にブログ友達を配備した。ブログ友達とは、micapon17と同様の趣旨のブログを持ち、micapon17とコメント欄でやり取りし合う間柄のネット上の友達のことである。複数人配備しておいた彼女らは、micapon17のブログが炎上しはじめたタイミングで、異口同音に「変な人が多くて怖いね～☆だからさいきんさあ、ＳＮＳに行っちゃおっかなって思ってんだ。micaponさんもいっしょにどお？」といった内容のメールを送信した。

こうして我々はmicapon17の誘導に成功し、現在、micapon17は我々の保護下で日々心霊写真の制作に勤しんでいる。第一子を出産したのちは、「今日のコーデ」に加えて動き回る子どもの写真も増えた。動き回る子どもというのは、それなりに写真撮影に通じた者であってもきちんとカメラに収めるのは難しい。micapon17の腕では、なおさらである。口元によだれを光らせながらおもちゃを振り回す子どもと、口元に血を光らせながらこちらへ手を差し伸べる心霊（脳天に斧）。micapon17から携帯電話を奪おうとはしゃぐ子どもと、その足下に転がる生首、バラバラの手足。「今日のコーデ」を撮影中のmicapon17とそのふくらはぎにまとわりつく子ども、

95
94 10154_おはなして子ちゃん_01.indd 2017/05/11 18:03

10 FUJINO sample_original IWP 2017

子どもの小さな肩に乗ってしゃがみ込み、えげつない笑顔を見せる痩せこけた老婆。こうした写真は、殊に生と死のコントラストをはっきりと写し出して我々を喜ばせ、また生きることの意味を深く問いかけて我々を沈黙させるものである。

美人は気合い

六角柱状の結晶がほうぼうから突き出ている、水晶のかたまりにきわめてよく似たものに、わたしは話しかける。

「うん、きれいだね」とわたしは言う。わたしはほんとうにそう認識している。

水晶のかたまりにきわめてよく似たものは、鏡の前にある。思春期の男性の平均質量とほぼ同等の質量を有しているが、もちろん体軀（たいく）のバランスは人類とは似ても似つかない。わたしは金属製の軽くて丈夫な腕を伸ばす。その先から糸状のやわらかな指が三十本ほど露出する。指々はほうぼうに広がり、そっとかたまりに触れる。六角柱状結晶の透き通った先端部分からじょじょに白く濁りゆくかたまりの中心へ、音もな

97
10154_おはなして子ちゃん_01.indd 96 2017/05/11 18:03